

東方の知られざる人々の物語

アレクサンドル・ボブロフ 越野剛 宮野裕 毛利公美 佐光伸一

はじめに

『東方の知られざる人々の物語』は、総じて「サモエド」と呼ばれたシベリアの諸民族を描いた中世ロシアの文学作品である。中世ロシアにとって、ウラル山脈やその向こうは未知の世界であり、この『物語』の中には、中世ロシアの人々が東方に対して抱いていた想像力の結晶を見ることができる。その一方で、一見奇想天外な描写の背景には、東方諸民族の民間伝承や彼らが用いていた語が色濃く影を落としており、中世ロシアと東方諸民族との交流の歴史を考える上でたいへん興味深い。我々は、このテキストの形成に影響を与えたとみられる他の様々な言説について紹介し、本文に登場する地名や言葉の背景について読者の理解を助けるため、原文テキストとその邦訳に続いて、注釈を付した。

次節で述べるように、このテキストにはいくつかの版が存在する。本稿の目的は、後述する理由により、伝統的に利用されてきた版と異なる版に基づいて邦訳を発表することである。まず、これまでと異なる版による邦訳の必要性を明らかにするため、このテキストの研究史を以下に簡単にまとめて紹介する⁽¹⁾。

1. 『物語』の研究史

この作品は中世ロシアにおいて生まれた後、長いあいだ「埋もれていた」。19世紀になってようやく、A.C. パヴロフがソロフキ修道院の写本コレクションのなかからこの作品の一写本（現在の整理番号 РНБ, Собр. Соловецкого монастыря, № 844/954. 彼によれば15世紀の写本）を「発見」したことで、『物語』の研究が開始されることになった⁽²⁾。

この『物語』の研究の最初の画期は Д.Н. アヌーチンの論文「エルマーク以前のシベリア観の変遷：中世ロシアの物語『東方の知られざる人々の物語』」（1890年）の発表である⁽³⁾。この論文では、パヴロフが発見したソロフキ写本を使って『物語』の公刊も行われた。

- 1 但し本来ならば触れられるべきである、この作品に関する長大な研究史について言えば、紙幅の関係上、重要な研究にのみ言及される。詳細については *Плигузов А. Текст-кентавр о сибирских самоедах. М.-Ньютонавилль, 1993. С. 109-137.* を参照のこと。
- 2 パヴロフが作成した写しに基づき、Н.А. フィルソフは学位論文の中でこのテキストを初めて公刊したものの、それは多くの誤りを含んでいた (*Фирсов Н.А. Положение инородцев северо-восточной России в Московском государстве. Казань, 1866. С. 29-30.*)。他方で А.В. オクショノフの研究には、歴史的地理的解説が含まれているものの、先行研究で指摘されているように、フィルソフと同じ誤りが繰り返されていた (*Оксенов А.В. Слухи вести о Сибири до Ермака // Сибирский сборник. СПб., 1887. Кн. 4. С. 113-114.*)。
- 3 *Анучин Д.Н. К истории ознакомления с Сибирью до Ермака: Древнее русское сказание «О человецех незнаемых в Восточной стране» // Древности. Труды Императорского Московского Археологического общества. М., 1890. Т. 14. С. 227-313.*

この時彼は更に5つの異本テキストを紹介している。そのなかには、今回我々が公刊するノヴゴロドのソフィア・コレクションの写本 № 1462 (アヌーチン論文では誤って № 1642 と記されている) も含まれていた。彼は、この写本の写しをとった H.C. チホヌラヴォフに依拠し、ソフィア写本を15世紀から16世紀のものと考えた。一方、アヌーチンが異本として利用した他の4写本は、更に後の17世紀初頭以降のものであった。

ところでアヌーチンは、公刊用の基本テキストとして、ソロフキとソフィアという初期の2写本のうちソロフキ写本を選んだ。その理由は、彼によれば、ソフィア写本には欠損があり(第2話)、その後も意味不明の話があるからであった⁽⁴⁾。しかし我々の考えでは、この結論は誤っている。実際にはソフィア写本にも2番目の話は存在する。恐らく彼が利用したチホヌラヴォフによる写しに欠損があったのだろう。だが、ソロフキ写本を重視するアヌーチンの見方はその後も長く受け継がれることになった⁽⁵⁾。

『物語』に関するその後の最も詳細な研究は、A.И. プリグーゾフの論文と研究書⁽⁶⁾である。彼はアヌーチンが利用した6写本に加え、アヌーチンの研究以降に知られるようになった8写本も検討の対象にした。ここにおいて初めて、現存する全14写本が検討対象になった。彼はそのうちの5写本のテキストを公刊し、残りの写本についても異文テキストの形で紹介した⁽⁷⁾。

更にプリグーゾフはこれらの写本のテキスト学的分析を行い、その結果、原テキストに大きく2つの版が存在することを明らかにした。本稿の筆者たちもこの結論に全く異論はなく、また以下ではテキスト伝承の複雑な歴史について述べられるので、ここで先に『物語』の全14写本を列挙し、またプリグーゾフが作成した写本系統図を引用しておく。

資料1：『物語』の写本一覧 (◎は刊行テキストで存在。△は異文テキストでのみ刊行済)

第1 編集版

М РГБ (Российская государственная библиотека), Музейное собрание, № 3271, л. 16-17. ◎

Б БАН (Библиотека Российской Академии наук), 4.3.15, л. 40 об.-41 об. △

第2 編集版

Соф... РНБ (Российская национальная библиотека), Софийское собрание, № 1462, л. 84-86. (ソフィア写本) △

О..... РГБ, Собрание Овчинникова, № 802, л. 337-339. △

А РГАДА (Российский государственный архив древних актов), ф.196, № 898, л. 34-37. ◎

4 Анушин. К истории ознакомления. С. 228.

5 但しソロフキ写本以外に基づいて公刊が行われなかったわけではない。例えば Д.Н. アヌーチンと同じ頃、А. チトフが16世紀の一写本(現在の整理番号 РНБ, Собр. Погодина, № 1572、参照 Сибирь в XVII веке: Сборник старинных русских статей о Сибири и прилежащих к ней землях / С предисл. А. Титова. М., 1890. С. 3-4 (1-я пар.); 3-6 (2-я пар.))に基づき『物語』を公刊した。この版は後に2度採録された。『物語』はアヌーチンの論文からも一度ならず転載されたが、その際利用されたのは基本テキストであるソロフキ写本だけで、異本はカットされた (Пыпин А.Н. История русской этнографии. СПб., 1892. Т. 4. С. 187-188; И.К. Сибирь по одной старинной рукописи // Енисейские губернские ведомости. 1900. № 25; Старцев Г.А. Самоеды (ненцы): Историко-этнографическое исследование. Л., 1930. С. 21-23; Токарев С.А. История русской этнографии (Дюктябрьский период). М., 1966. С. 37-38.)

6 Плигузов А. Первые русские описания Сибирской земли // Вопросы истории. 1987. № 5. С. 38-50; Плигузов. Текст-кентавр.

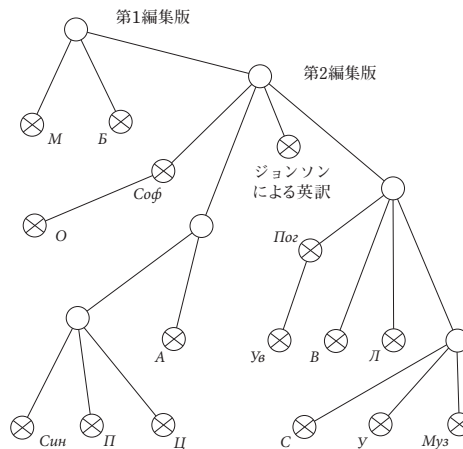
7 Плигузов. Текст-кентавр. С. 76-104.

- Син... ГИМ (Государственный Исторический музей), Синодальное собрание, № 272, л. 340-343. △
 П..... РГБ, Собрание Попова, № 59, л. 73-75 об. △
 Ц..... РГАДА, ф.181, № 591, л. 692-696. △
 Пог.... РНБ, Собрание Погодина, № 1572, л. 112-114 об. ◎
 Ув..... Собрание Царского 245 / Собрание Уварова, временный № 312. (かつて存在したがその後紛失) △
 В..... РГБ, Собрание Попова, № 62, л. 85-88 об. △
 Л..... РГБ, Собрание Беляева, № 43, л. 66-68. △
 С..... РНБ, Соловецкое собрание, № 844/954, л. 303-307. (ソロフキ写本) ◎
 У..... РГБ, Собрание Ундольского, № 761, л. 85-88. △
 Муз.... РГБ, Музейное собрание, № 4305, л. 186-188. (一部分のみ刊行) △

ジョンソンによる英訳

Richard Hakluyt, *The Principall Navigations, Voiages and Discoveries of the English Nation* (London, 1589), p. 389.

資料 2：『物語』諸写本の系統図 (Плигузов. Текст-кентавр. С.138 をもとに作成)



2. テキスト伝承の歴史と二つの編集版

プリグーゾフは現存する『物語』の全写本を検討し、上掲の系統図を作成した。彼の分析によれば、合計 14 の現存写本のうち 2 つの写本がいわゆる第 1 編集版に属し、上述のソロフキ写本、ソフィア写本をはじめ残りの 12 の写本は第 2 編集版に属するという。

先に成立したと考えられる『物語』の第 1 編集版は、プリグーゾフが確認したように、РГБ, Музейное собрание, № 3271 (以下 M) と БАН, 4.3.15 (以下 B) という 2 つの写本により代表される。前者は 1490 年代後半のものであり、ウラル山脈 (そしてシベリアにも) に近いペルミ主教座で、当時の主教フィロフェイの周辺で作成された可能性が極めて高い⁽⁸⁾。他方で 1510 年代に作成された B 写本についてもまたプリグーゾフはペルミ主教座で製作されたと考えている⁽⁹⁾。また B 写本には、やはりウラルやシベリアに近いウスチ・ヴィムの町で 1484 年に行われたペルミ主教が列席したユグラとコード諸公 (共にシ

8 Плигузов. Текст-кентавр. С. 113-115.

9 Плигузов. Текст-кентавр. С. 50.

ベリアの民族)の戴冠パレードに関する興味深い記述も『物語』とは別に含まれている⁽¹⁰⁾。また『物語』に登場する民の大部分は、ユグラの地の周りに住んでいた⁽¹¹⁾。プリグーゾフはこうした状況に鑑み、『物語』第1編集版の成立を、1483-1484年に行われたモスクワ軍のユグラ遠征と結びつけている。すなわち、第1編集版とは、ペルミにおいて、主教フィロフェイとその取り巻きがユグラの民から直接、周辺地域に関する伝承を聞き出し、書き留めたものであったという⁽¹²⁾。

プリグーゾフに従えば、その後、16世紀初頭までに、やはりペルミ主教の周辺で第1編集版の『物語』は改訂され、第2編集版が成立した。というのも、プリグーゾフによれば、第2編集版の最古の写本であるソフィア写本の『物語』は先に言及した第1編集版のM写本の『物語』と同じ筆致によって筆写されていたからである。また作成場所についてプリグーゾフは、「ウスチ・ヴィムの彼の公邸、または1501年4月から1507年10月1日以降の死に至るまでこのペルミ主教が隠遁生活を送ったフェラポントフ修道院」で書かれたと考えている⁽¹³⁾。

2つの編集版の間の主なテキストの違いに言及したプリグーゾフによれば、第2編集版には表題がつけられ、話のひとつ(「リンヌイのサモエド」について)が書き足され、更に重要な細部の描写も多々加えられている。エキゾチックさにおいても、第2編集版の方が第1編集版よりも際立っており、例えば第2編集版では、サモエドが死んだ仲間だけでなく、旅先で死んだ「客人」も食べたと記されている他、サモエドは「速く、巧みに弓を撃ち」、鹿だけでなく、犬にも乗ったと語られている。また、第1編集版と比較とすると、第2編集版には話し言葉の要素(助詞《деи》)が欠落している。地下の湖と死人の行進に関する詳細な記述も、第2編集版で加えられたものである⁽¹⁴⁾。これらのことから、第1編集版が「草稿的」特徴を持っており、それ故に今日まで2つの写本しか伝わらなかったことは明らかである。第2編集版は第1編集版を元にして芸術的に「仕上げられた」テキストであり、こちらが写本として広まった。16世紀にロシアを訪れたイギリス商人リチャード・ジョンソンが作成した『物語』の英訳に利用されたのも、第2編集版のテキストだった⁽¹⁵⁾。

10 Плигузов. Текст-кентавр. С. 117-118.

11 Плигузов. Текст-кентавр. С. 53.

12 Плигузов. Текст-кентавр. С. 48-50, 53.

13 Плигузов. Текст-кентавр. С. 115-117. 一方ソロフキ写本は1530-40年に作成された(Плигузов. Текст-кентавр. С. 119-122.)。ちなみにソフィア文集の中にはプリグーゾフによって発見され公刊された『ペルミ案内記』の唯一の写本が含まれている。この『案内記』では『物語』と同じように、中世ロシアではあまり知られていなかった、シベリアを含む東方の地域について語られている(Плигузов. Первые русские описания. С. 49-50; Плигузов. Текст-кентавр. С. 25-27)。尚、我々の著者の一人(А.Г. Бобров)は『物語』の成立をキリロ・ペロオーゼロ修道院の修道司祭エフロシンと結びつける新説を発表している。Бобров А.Г. Проблема подлинности «Слова о полку Игореве» и Ефросин Белозерский // Acta Slavica Iaponica. 2005. Т. 22. 特に第4章を参照。

14 Плигузов. Текст-кентавр. С. 127-129.

15 Плигузов. Текст-кентавр. С. 105-106, 126, 136-137.

3. 公刊テキストの選択について

今回、我々のテキスト公刊と訳出では、まさにこの第2編集版に含まれるソフィア写本を使用することにした。歴史史的観点からすれば、ユグラの民から聞き取られた話をより直接的に反映していると考えられる第1編集版のテキストの公刊が望ましいことは言うまでもない。しかし、文学的観点、また中世ロシアの人々の世界像を明らかにするという観点から見れば、「一次資料」を元にしつつも彼ら自身により整えられたテキスト（つまり第2編集版）の方が重要である。なぜならまさにそのなかにこそ、中世ロシアの人々が持つ東方観が反映されているに違いないからである。よって第2編集版は第1編集版と同等、或いはそれ以上に興味深く、公刊に相応しいものであるといえる。

では第2編集版のなかで、なぜソフィア写本を我々が選んだのか。プリグーゾフは、第2編集版の写本の中で最古のものが、これまでの数々の刊行で基本テキストに利用されてきたソロフキ写本ではなく、ソフィア写本であることを明らかにしている。後者は他の著作と共に綴じられて一つの文集を構成している。この文集が編まれたのは1500年頃、あるいは1500年代の初めである⁽¹⁶⁾。それにも拘わらず、この写本はこれまで、基本テキストとして公刊されたことがないのである。

さらに、プリグーゾフの文献学的研究成果を総括する写本系統図(上記)によると、ソフィア写本は仮説的な中間写本なしで第2編集版の原型に直接遡る唯一の写本である⁽¹⁷⁾。このように、ソフィア写本はソロフキ写本よりも古く、原型に近いテキストであることが明らかである。それにもかかわらず、プリグーゾフが『物語』第2編集版の公刊の際に、ソロフキ写本を基本テキストにしてしまった。恐らくは、彼がアヌーチン以降の学問的伝統に引きずられたということもあるだろう。

アヌーチンとプリグーゾフはソフィア写本を『物語』テキストの写本による違いを示すために用いたにすぎなかった。そこで我々は作品全体をこの写本から活字におこすことを重要とみなす。『物語』のもっとも完全に古いこのテキストの後に、我々は日本語訳と注釈を付した。

4. 活字化の際の規則について

今回のソフィア写本による『物語』テキストの発表に際しては、我々はプリグーゾフの版にならって部族ごとにテキストを九つに分け、仮に番号を振った。また15世紀末までに書かれたテキスト刊行に用いられる従来の規則に従う(行上への繰上げ文字は行内に含めるが、イタリック体によって区別する。略語符によって省略された綴りは()内に記す。ѣとѥは語末を含めてどの場所にあっても、そのまま残す。使用されなくなった文字はѦを除き現代の正書法で定められたものを用いる。句読点は現代の規範にあわせて導入する)。なお、[]内の文字は、写字生がそれらの文字を朱書きにしようとしたため、空白

16 Плигузов. Текст-кентавр. С. 116.

17 Плигузов. Текст-кентавр. С. 138.

のままになっていた。19世紀になって鉛筆書きの補足によってその空白が埋められた。

СКАЗАНИЕ «О ЧЕЛОВЕЦЕХ НЕЗНАЕМЫХ В ВОСТОЧНОЙ СТРАНЕ»

(древнерусский текст)

РНБ, Софийское собр., № 1462, л. 84-86.

л.84	[О] ч(е)л(ове)цѣх незнаемых въ Вѣсточнѣи странѣ, о языцех разных и иновидных
л.84об.	<p>[1] [Н]а Вѣсточнѣи странѣ, за Югорьскою землею, над морем живут люд(и) самоѣдь, зовомыя малгонзѣи. Ъства их мясо оление да // рыба, да меж собою друг друга ядят. А гость к ним откуды придет, и они дѣти свои закалают на гости, да тѣм кормят. А которые у них гость умрет, и они тог(о) съѣдают, а в землю не хоронят, а своих також(е). Съ же люд(и) невелики възрастом, плосковицы, носы малы, но рѣзвы велми и стрѣльцы skóry и горазди. А плат(ь)е носят соболие и оление. А ѣдят на оленех и на собаках. А товаръ их соболи.</p>
	<p>[2] [В]ъ тои ж(е) странѣ за тѣми люд(ь)ми, за тѣм же морем, живут люди иная самоѣдь, такова ж(е) линнаа словоет. [В] лѣтъ м(е)с(я)ць живут в морѣ, а на сушѣ не живут тог(о) дѣля, тог(о) м(е)с(я)ца, занеже тогды тѣло на них трѣскается. И они том м(е)с(я)ць в водѣ лежат, а на берег не вылазят.</p>
	<p>[3] [В]ъ тои ж(е) странѣ, за тѣми люд(ь)ми, над тѣм же морем, ес(ть) иная самоѣдь: по пупъ люди мохнаты до долу⁽¹⁸⁾, а от пупа вверхъ — как и прочии ч(е)л(ове)ци. А яд(ь) их рыбы да мясо. А торгъ их соболи, да песци, да пыжи, да олении кожи. А плат(ь)е носят, в том же шьют.</p>
л.85	<p>[4] [В]ъ тои ж(е) странѣ за тѣми люд(ь)ми, над тѣм же морем, ес(ть) иная самоѣдь такова: вверху рты, рот на тѣмени имѣют, а не говорят. А видѣние в по//шлину ч(е)л(ове)че. И коли ѣдят, и они крошают мясо или рыбу, да кладут под шапки. И как почнут ясти, и они плечима движут и вверхъ, и вниз.</p>
	<p>[5] [В]ъ тои ж(е) странѣ за тѣми люд(ь)ми ес(ть) иная самоѣдь такова, как и прочии ч(е)л(ове)ци, но зимѣ умирают на два м(е)с(я)ца. Умирают же тако: как котораг(о) застанет в тѣ м(е)с(я)ци, тот туто и сядет, а у нег(о) из носа вода изоидет, как от потока, да вмерзнет в землю. И кто ч(е)л(ове)къ иные земли, невѣд(е)нием поток тои отразит у нег(о), и сопхнет его с мѣста, тои оживет, и познает, и речет: «О чем мя еси, друже, поуродувал?» И пак(и) оживают, как с(о)лнце на лѣто вернется. Так на всякыи год оживают и умирают.</p>
	<p>[6] [В]ъ тои ж(е) странѣ, вверху Оби, рѣкы великыя, ес(ть) такова земля, Баид именуется. Лѣса на ней нѣт, а люд(и) на ней, как и прочии ч(е)л(ове)ци, живут в землѣ. А ѣдъ их мясо соболие. А иног(о) у них никотораг(о) звѣря нѣт, опроче соболи. А носят плат(ь)е все соболие, и рукавицы, и ногавицы. А иног(о) плат(ь)я у них нѣт, ни товару никотораг(о). А соболи ж(е) у них черны велми и великы: шерсть живаг(о) соболя по землѣ ся волочит.</p>
л.85об.	<p>[7] [В]ъ тои же странѣ ес(ть) такова самоѣдь: в пошлину как ч(е)л(ове)ци, // но без голов. Рты у них меж плечми, а очи в грудех. А яд(ь) их — головы олении сырые. И коли им ясти, и они головы олении сырые възметывают себѣ в рот, на плечи, а на другыи д(е)нь кости измещут(ь) из себе туда ж(е). А не говорят. А стрѣлба ж(е) их такова — трубка желѣзна в руцѣ, а въ другои руцѣ стрѣлка желѣзна. Да стрѣлку ту въкладывает в трупку ту, да бьет молотком в стрѣлку ту. А товару у них никотораг(о) нѣт.</p>

18 手稿ではこの語は полу と書かれた後、訂正が加えられている。

<p>л.86</p>	<p>[8] [В]ъ верху тоя ж(е) рѣкы Оби великия, в тои ж(е) странѣ ес(ть) инаа самоѣдь, ходят по подземелию иною рѣкою, д(е)нь да ночь съ огнем, и выходят на озеро. И над тѣм озером свѣт пречюден, и град велик стоит над ним, а посада нѣт у нег(о). И коли поѣдет кто къ граду тому, и тогда шум велик слышети въ градѣ том, как и въ прочих градѣх живущих. И как приидут в нег(о), ино люди в нем нѣт, ни шуму не слышети никоторог(о), ни иног(о) чег(о) животна. Толико въ всяких дворѣх ясти и пити мног(о) всег(о), и товару всяког(о), кому что надобѣ. И он, положи вѣ сѣну противу тому, да възмет, что кому надобѣ, и проч(ь) отходят. А кто что без цѣны възмет, и как прочь отидет, и товаръ изгнет у него, и обряцется // пак(и) в своем мѣстѣ. И как прочь поѣдут от града тог(о), и шум пак(и) слышети, как и в прочих градѣх живущих.</p> <p>[9] [В]ъ Всточнѣи ж(е) странѣ ес(ть) инаа самоѣдь, зовомаа каменскаа, облежит около Югорские земли, а живут по горам высоким. А ѣздят на оленех и на собаках. А плат(ь)е носят соболие и оление. А яд(ь) их мясо оление, да и собачину, и бобровину сыру ядят. А кровь пьют ч(е)л(ове)чю и всякую. Да ес(ть) у них таковы люд(и) лѣкари: у которог(о) ч(е)л(ове)ка внутри нездорово, и они брюхо рѣжут, да нутрь вынимают и очищают, и пак(и) заживляют.</p> <p>Да въ сеи ж(е) самоѣди видали, — скажут самоѣдь ж(е) старые люд(и), — з горы, подлѣ море, мертвых своих: идут, плачущи, множ(е)ство их, а за ними идет послѣ их велик ч(е)л(ове)къ, поганяа их палицею желѣзною⁽¹⁹⁾.</p>
-------------	--

「東方の知られざる人々」の物語

(РНБ, Софийское собр., № 1462, л. 84-86. からの和訳)

東方の知られざる人々、様々な風変わりな民について

- (1) 東方のユグラの地の彼方、海のほとりにサモエドの人々が住んでおり、マルゴンゼイと呼ばれている。食物は鹿の肉と魚だが、互いに共食も行う。どこかから客人が訪れることがあると、自分の子を客人のために殺して、これを御馳走する。自分たちのところで客人の誰かが死ぬと、それも食べてしまい、土に埋めることはしない。自分たちの仲間が死んだときもそうする。
この人々は背丈が低く、顔が平らで、鼻が小さい。しかし動作は機敏であり、素早く巧みに矢を射る。着る服はクロテンと鹿の毛皮である。乗り物には鹿と犬を使う。商品はクロテンである。
- (2) 同じ方角で、その人々よりも先の方、同じ海の向こう側に住んでいる人々は、「リンヌイ」と呼ばれる別のサモエド人である。彼らは夏の一ヶ月を海の中で暮らす。陸で暮らさないのは、この月に身体がひび割れるからである。それで、この一ヶ月の間、彼らは水の中に横たわり、岸に上がることをしない。
- (3) 同じ方角で、その人々よりも先の方、同じ海の向こう側には別のサモエド人がいる。へそから下が毛むくじゃらだが、へそから上は他の人間と同じである。食物は魚と肉である。商品はクロテン、北極狐、トナカイの子、鹿の毛皮である。これらの毛皮を縫った衣服を着る。
- (4) 同じ方角で、その人々よりも先の方、同じ海の向こう側には別のこのようなサモエド人がいる。口は上にあり、頭頂部についており、喋ることはできない。姿は人間に似ている。食事を

19 желѣзною という語は手稿では行内に収まらず、右側の余白に書かれている。

する場合、肉や魚を刻んで、帽子の下に入れる。食べ始めると、両肩が上下に動く。

- (5) 同じ方で、その人々よりも先の方に別のこのようなサモエド人がある。普通の人間に似ているが、冬の二ヶ月間は死んでいる。その死ぬ様子がこの時期には見かけられる。彼らがその場に腰を下ろすと、鼻から水がどっとほとぼしり、地面に凍りつく。もし誰か他所の土地の者が何も知らずにこの水柱を取り除いて、その場から人を動かすと、その者は蘇って意識を取り戻し、「おまえさん、どうして俺を不具にしたんだ」と言う。太陽が夏に戻ってくると、彼らは再び蘇る。こうして年ごとに彼らは蘇っては死ぬ。
- (6) 同じ方で、大河オビの上流にバイドと呼ばれる土地がある。その地に森はなく、住民は普通の人間に似ており、地中に住む。食物はクロテンの肉である。クロテンのほか動物は全くいない。着る服はクロテンの衣服ばかりであり、手袋や靴もそうである。それ以外の衣服はなく、商品も他にはない。彼らのクロテンは非常に黒くて大きい。生きたクロテンの毛は地面を擦るほどである。
- (7) 同じ方に、人間の姿をしているが頭のないサモエド人がある。口は両肩の間にあり、目は胸についている。食物は生の鹿の頭である。食事をするとき、生の鹿の頭を肩の上にある口に投げ入れ、翌日にはそこから骨を吐き出す。喋ることはできない。矢を射るときは一方の手に鉄の管を持ち、他方の手に鉄の矢を持つ。鉄の管に鉄の矢を通し、槌で矢を叩く。彼らのところに商品は何も無い。
- (8) 同じ大河オビの上流、同じ方に別のサモエド人がある。地中にある別の川を伝い、昼も夜も灯をかざして歩き、湖に出る。湖の上には不思議な光がとまり、大きな都市が湖を見下ろす位置にあるが、城下町(ボサド)はない。誰かがこの都市に近づいていくと、他の生ある都市と同じように賑やかな喧騒が聞こえる。都市に入ると、人影はなく、喧騒も全く聞こえず、生あるものの気配もしない。ただしどの屋敷にも食物や飲物が山をなし、入用な商品は何でも揃っている。そこで商品の対価を置いて、入用な物を取って外に出る。もし対価を置かず物を取って出ると、商品はその者の手から消えて再び元の場所に現れる。そしてその都市から離れると、他の生ある都市と同じような喧騒が再び聞こえる。
- (9) 東方に「カメンスカ」と呼ばれる別のサモエド人がいて、ユグラの地の近く、高い山に住む。乗り物には鹿と犬を使う。着る服はクロテンと鹿の毛皮である。食物は鹿肉、大肉やビーバーの肉を生のまま食べる。血ならば人間のでも何でも飲む。それから、彼らのところには薬師(レカリ)の人々がいる。体内に病気を持った人がいると、彼らは腹を切り開き、内臓を取り出し、洗い清めて、元通りに癒す。

サモエドの老人たちが語るところによれば、同じその地のサモエド人たちは、海の近くに死んだ仲間がいるのを山から見たと。沢山の死者が泣きながら歩き、その後ろから鉄の棒で死者を追い立てながら巨人が続いたそうだ。

注 釈

〔表題〕

第1編集版の写本には表題が欠けている。ブリゲーズフが指摘したように、「東方 Вѣсточная страна」には、『セルビアのアレクサンドリア⁽²⁰⁾』の話をなかでアレクサンドロス大王が「多くの文字のない言語、そして驚きの半人半獣の群れを見た」場所である「東のくに страна Востока という名前との」類似点を見ることが出来る⁽²¹⁾。また「風変わりな иновидные」という句はソフィア写本だけに追記されている。11-17世紀ロシア語辞典によれば、「風変わりな」は「別の種類に属す」を意味する⁽²²⁾。辞典で引き合いに出された例は、外見ばかりか、起源（分類）における差も考慮されていることを物語る。「風変わりな иновидна」というのは、見た目或いは本質で区別されることであり、例えば人と馬のような関係である⁽²³⁾。

〔1〕

「ユグラの地の彼方」…ユグラ、ユグラの地というのは、オビ川流域のウゴル人（ヴォグール〔現在のマンシ人〕とオスチャキ〔現在のハンティ人〕）が住むくにである。このくには15-16世紀頃にオビ川流域で見いだされた。それ以前にはこれらの民はウラル山脈以西に住んでいたが、14世紀頃にウラル以東に退いた⁽²⁴⁾。従って「ユグラの地のかなた」という表現は「北氷海に接する、オビ川流域」⁽²⁵⁾を表す。ロシア人とヴォグール人、そしてオスチャキ人の交流はその後長く続いたが、その最初は1483年のユグラへの遠征と、1484年の和平交渉である⁽²⁶⁾。「ユグラ」はコミ語の jegra 「ヴォグールとオスチャキ」に遡る⁽²⁷⁾。アヌーチンによれば、「jograjass (jassは複数形を表す)は、ジリヤン人（つまりコミ人）が自分の隣人ヴォグールとオスチャキを表すために用いたものであり、更に jogra は元々『荒々しい』、『野蛮な』、『未開人』を意味した」⁽²⁸⁾。

「サモエドの人々」…11-17世紀ロシア語辞典によれば、「サモエド」とは「ロシア北部とシベリアに住む諸民族（ネツ人、セリクプ人その他）の一般名称」である⁽²⁹⁾。「サモエド」という用語は、アヌーチンが指摘したように、『物語』では、「北方の異様で野蛮な民族（但しユグラを除く）全体を表す普通名詞であり、殆ど『異人』、『未開人』の語と等しい」ものであった⁽³⁰⁾。「物語」において「サモエド」の民族呼称を授けられているのは、

20 『セルビアのアレクサンドリア』はアレクサンドロス大王についての小説の新たな異本であり、セルビアで書かれたとされている。Александрия: роман об Александре Македонском по русской рукописи XV века / издание подготовили М.Н. Ботвинник, Я.С. Лурье и О.В. Творогов. М.-Л., 1965. С. 7-71.

21 Плигузов. Текст-кентавр. 1993. С. 38.

22 Словарь русского языка XI-XVII вв. (СРЯ). Вып. 6. М., 1979. С. 237.

23 Изборник великого князя Святослава Ярославича 1073 г. СПб., 1880 (Издание Общества любителей древней письменности. № 55). С. 235.

24 Плигузов. Текст-кентавр. С. 46.

25 Анучин. К истории ознакомления. С. 247-248.

26 Плигузов. Текст-кентавр. С. 48-49, 141-153.

27 Анучин. К истории ознакомления. С. 715.

28 Анучин. К истории ознакомления. С. 248.

29 СРЯ. Вып. 23. 1996. С. 39.

30 Анучин. К истории ознакомления. С. 249.

明らかに北方サモエド・グループの民、すなわちネネツ人、エネツ人であり、恐らくはガナサン人も含まれる。

「マルゴンゼイ малгонзѣи」…「マルゴンゼイ」（後の写本では「モルゴンゼイ）」という民族名称の起源をめぐるは、様々な説がある。アヌーチンは、それまで流布していた諸説（この語の起源をサモエドの氏族「モカゼエ моказее」、「モカセ мокасе」、或いは「サモエド公マカゼイ Маказеи」某の名前に見る説）をいずれも信憑性を持たないものとして退け、地名にその由来を求めた⁽³¹⁾。彼の仮説によれば、この名称は、タズ川の旧称「マンガゼイ мангазеи」およびモルゴムサイア（モルゴムサイヤ）のくにと関係がある。モルゴムサイヤのくには16世紀後半のヨーロッパの地図でオビ川の向こう（すなわちタズ川流域）に位置している。モルゴムサイヤは「ユラク・サモエド」（現在のネネツ）の malhana（「末端の」、「辺境の」を意味する）に起源を持っており、モルゴンゼイとは「地の果て、世界の果てに、その他のサモエド氏族のまさに末端に住む〔人々〕」を意味する⁽³²⁾。しかしアヌーチンの説が広く認められることはなく、彼以降のサモエド語の研究者たちは、この民族名称の由来を以前のようにサモエドの氏族の呼称（エネツ人の一氏族の名称 monkasi/monkandi/monkanzi、或いは moggadi/mogad'i）に帰する見方をとっている⁽³³⁾。ドルギフによれば、ムガジ族という氏族が17世紀に知られており⁽³⁴⁾、エネツ人の歴史説話のなかにも同じ氏族が登場する⁽³⁵⁾。1600年、或いは1601年にタズ川河畔に建設されたロシア都市マンガゼイ мангазеи の名称もまた、この民族名称に起源を持つ⁽³⁶⁾。

「互いに共食いも行う」…アヌーチンの意見では、「どこか北方における人食い民族の存在に関するイメージが太古からあり」、16-17世紀の外国人旅行者の多くもまたサモエド人が人食い人種であると考えていたが、しかしそれでも尚この情報は「疑わしい」という⁽³⁷⁾。「サモエド〔直訳すればサモ「自分」+エド「食べる」〕」という民族名称は「自らを自分たちで食べる」ことを意味する、という理解は文献で広く普及している⁽³⁸⁾。研究者たちの意見では、この民間語源解釈的な読み替えは「極めて古い」が、しかし「誤ったもの」である。実際には、サモエド（サモヤジ）はラップランド人（サアム人）の言葉である Same-aena、Same-aednam(a)（サアム人のくに）に遡る⁽³⁹⁾。ロシア人はこの言葉からサモエドという言葉を作ったのであり、当初はラップランド人とサモエドを同じ氏

31 Анучин. К истории ознакомления. С. 256.

32 Анучин. К истории ознакомления. С. 255-261.

33 Прокофьев Г.Н. Селькупская грамматика. Л., 1935. С. 10; Вербов Г.Д. О древней Мангазее и расселении некоторых самоедских племен до XVII в. // Известия Всесоюзного Географического общества. 1943. Т. 75, вып. 5. С. 16-22; Плигузов. Текст-кентавр. С. 53-54; Анучин. К истории ознакомления. С. 373-374.

34 Долгих Б.О. Родовой и племенной строй народов Сибири в XVII в. М., 1960. С. 138-143, 614-615.

35 Мифологические сказки и исторические предания энцев / Записи, введ. и комм. Б.О. Долгих. М., 1961. С. 227-234, 238.

36 Анучин. К истории ознакомления. С. 249-255.

37 Анучин. К истории ознакомления. С. 263-264.

38 Герберштейн С. Записки о Московии / Отв. ред. В.Л. Янин. М., 1988. С. 157; Витсен Н. Путешествие в Московию: 1664-1665. Дневник / Пер. со староголландского В.Г. Трисман. СПб., 1996. С. 116.

39 Аникин А.Е. Этимологический словарь русских диалектов Сибири: Заимствования из уральских, алтайских и палеоазиатских языков. 2-е изд., испр. и доп. М.-Новосибирск, 2000. С. 481.

族だと考えていたという⁽⁴⁰⁾。先行研究では、サモエドの人食いについての話がヴォグール人とオスチャキ人の伝説にあることが指摘されている。そして「これら全ての話が誇張され、考え出されたものであったにせよ、これらの話が存在して流通していたという事実は残る」という⁽⁴¹⁾。一方、ガナサン人のフォークロアには、ネネツ人の神話に登場する人食い巨人シゲについての話がある。今回発表するテキスト（「東方の知られざる人々の物語」）における人食いのモチーフは、要するに、「サモエド」の民族名称の誤った民間語源解釈的な読み替えに起源を持つそうした伝説の影響下で現れた（現実には、サモエド民族には人食いの慣習はない）。

「自分の子を殺して…土に埋めることはしない。自分たちの仲間が死んだときもそうする」…プリグーズフが指摘したように、死んだ仲間を食べる人々については、パタラのメトディオスの「黙示」のなかで、「〔彼らは〕死者を埋葬せず、そればかりかそれを食べた」と記されている⁽⁴²⁾。このテキストでは、死んだ自分の子供を食べることについても（「死んだ自分の子供を」〔彼らは食す〕）語られていることを指摘しておこう⁽⁴³⁾。エネツ人のフォークロアでは、人食いシヒロに関する記述が知られている。彼らは、とりわけ客人が彼らのもとにやって来た時に、自分たちの下の娘を刻んで食べようとした⁽⁴⁴⁾。

「自分たちのところで客人の誰かが死ぬと、それも食べてしまい、土に埋めることはしない。自分たちの仲間が死んだときもそうする」…第2編集版ではこのフレーズは完全に別の意味に変わった。すなわち元の第1編集版では、話は「サモエド人」が「客人」を食したのではなく、仲間の死者を食したにすぎなかった（「死んだときは、土に埋めずにそれを食べる」⁽⁴⁵⁾。第2編集版の編者は「客人」、「それを」、「自分たちの仲間が死んだときもそうする」という語を付け加えた）。

「背丈が低く、顔が平らで、鼻が小さい」…古代ロシア語では「възраст〔現代語では年齢〕」は、第一に、「背、大きさ」であった⁽⁴⁶⁾。「平らな顔」について言えば、『11-17世紀ロシア語辞典』の著者は、『東方の知られざる人々』の例だけに基づいて、この語を「（人に関して）肩幅の広い、がっしりした」と訳している⁽⁴⁷⁾。しかしながらむしろ、ここで言われているのは、容姿でなく、顔についてである。N. ヴィツェンは次のようにサモエド人を描写している。「彼らは背が低く、広い顔で、細い目、平たい鼻を持つ」⁽⁴⁸⁾。アヌーチンによれば、「サモエドの大多数は、モンゴル人の顔の特徴を表出しており、それはつまり広く際だった頬骨、平たい（へこんではいない）眉間、小さな鼻であり、このことは彼らの顔をヨーロッパ人よりも平板にしている」⁽⁴⁹⁾。

「素早く巧みに矢を射る」…この部分は専ら第2編集版にのみ見られる。「巧みに

40 Анучин. К истории ознакомления. С. 263.

41 Анучин. К истории ознакомления. С. 264-266.

42 Плигузов. Текст-кентавр. С. 35.

43 Апокрифы Древней Руси: Тексты и исследования. М., 1997 (сер. «Общественная мысль: Исследования и публикации»). С. 24.

44 Мифологические сказки и исторические предания энцев. С. 75, 81-82.

45 Плигузов. Текст-кентавр. С. 78.

46 СРЯ. Вып. 2. 1975. С. 304.

47 СРЯ. Вып. 15. 1989. С. 100.

48 Nicolaes Witsen, *Nord en Oost Tartaryen* (Amsterdam, 1785), p. 949.

49 Анучин. К истории ознакомления. С. 267-268.

gorazdi] は非常に希な言葉である。『イーゴリ軍記』を除けば、この言葉は、ペロオーゼロのエフロシンの最古の写本で知られる若干の年代記と著作（『至賢なるアヒカルの物語⁽⁵⁰⁾』、『セルビアのアレクサンドリア』、『ザドンシチナ』）に存在する⁽⁵¹⁾。

「…と犬」…この補足は第2編集版にのみ見られる。アヌーチンは、「本来のサモエドの移動手段は鹿であり、犬に乗ったのはオスチャキ人であった」と指摘した⁽⁵²⁾。或いは犬に乗るのはロシア人であった⁽⁵³⁾。一方、オスチャキ人（現在のハンティ人）はネネツ人から鹿の利用を取り入れた⁽⁵⁴⁾。

[2]

「同じ方角で…陸で住まない」…この部分は第1編集版の写本ではそっくり抜けている。

「[リンヌイ] と呼ばれる別のサモエド人である」…「リンヌイ」とは「毛の生え替わりの時期に仕留められた（毛皮）」或いは冬の羽毛を失って「禿げた（水鳥）」という意味の形容詞である⁽⁵⁵⁾。羽毛の生え替わりの時期に鳥は飛ぶことが出来ないため、この時期に北方民族はこれらの鳥を集団で狩猟した⁽⁵⁶⁾。恐らく、この民族名称は、何らかの形で獣或いは鳥の羽毛の生え替わりと結びついていた。なぜならこの民族グループにとっては、『物語』によれば、季節による暮らしの変化が特徴的であるからである。

「一ヶ月を海の中で暮らす。陸で暮らさない」…アヌーチンの考えでは、「ここでは、人ではなく、アザラシやセイウチに類した何らかの海獣が念頭に置かれている」という。しかしながら続いて彼は、この情報が恐らくは、サモエドが夏に漁業と海獣猟に従事するために移動する慣習が間違っ理解されて伝わったものであり、この慣習の間違った解釈とは「人や鹿の血を吸う、恐ろしい蚊や蛇に関する話」により引き起こされたものであると書いている⁽⁵⁷⁾。プリグーゾフは、このテキストといくつかのテキストの間の類似点を指摘している。一つは『インド帝国の物語⁽⁵⁸⁾』で、そこでは「宝石」の探索者に関して「ある者は3ヶ月またある者は4ヶ月間その川に潜る」と記されている⁽⁵⁹⁾。二つ目は、マンシ人の伝説（それによればヌマ神の息子たちが海に住んでいた）⁽⁶⁰⁾、そして三つ目はサモエド人の水中に住む民についての伝説⁽⁶¹⁾である。エネツ人の神話には、裸で水中に住む2人の兄弟に関する物語がある⁽⁶²⁾。プリグーゾフの意見では、『物語』のこの断片をC.へ

50 『至賢なるアヒカルの物語』は古代アッシリア王センナケリブの財務官にして助言者アヒカルの話である。

Библиотека литературы древней Руси (БЛДР). Т. 3. СПб., 1999. С. 28-57, 362-364.

51 Словарь-справочник «Слова о полку Игореве». М.-Л., 1965. Вып. 1. С. 168.

52 Ануцин. К истории ознакомления. С. 268.

53 Народы Сибири / Под ред. М.Г.Левина, Л.П. Потапова. М.-Л., 1956 (сер. «Народы мира: Этнографические очерки»). С. 618.

54 История Сибири. Л., 1968. Т. 1 (Древняя Сибирь / Отв. ред. А.П. Окладников). С. 354.

55 СРЯ. Вып. 8. 1981. С. 236.

56 Мифологические сказки и исторические предания энцев. С. 238.

57 Ануцин. К истории ознакомления. С. 269-271.

58 『インド帝国の物語』は、伝説上のインドの司祭にして王、プレスター・ジョンがビザンツ皇帝マヌエルにあてたことになっている「書簡」である。БЛДР. Т. 5. 1997. С. 396-401, 523.

59 Плигузов. Текст-кентавр. С. 35; БЛДР. Т. 5. С. 398.

60 Плигузов. Текст-кентавр. С. 40.

61 Плигузов. Первые русские описания. С. 40.

62 Мифологические сказки и исторические предания энцев. С. 70.

ルベルシュテインは自由に作り直している（「タチン川には、完全に人間と同じ頭、目、鼻、口、手、足、そしてその他の体の部分をもつが、いかなる声も発しない魚が生息する」）⁽⁶³⁾。

[3]

「別のサモエド人がいる。へそから下が毛むくじやら」…アヌーチンによれば、ここでは「下半身に毛足の長い毛皮の毛のついた方を外側にして作った衣服を着た」人々が念頭に置かれている⁽⁶⁴⁾。ヘルベルシュテインが書くところでは、オビ川の向こうにタチン川があり、「言い伝えによればこの〔タチン川の〕向こうには怪物の姿をした人々が住んでいる。彼らのうちのあるものたちは獣のように、体全体が毛で覆われている」という⁽⁶⁵⁾。ブリゲーズフは『インド帝国の物語』との類似点を指摘する⁽⁶⁶⁾。すなわち皇帝であるプレスター・ジョンのくにでは、「家畜の足を持つ人々」が住んでいるという⁽⁶⁷⁾。

「トナカイの子」…ここで用いられている *пыжи* という言葉は、通常は生後6ヶ月以内のトナカイの子を指し、毛皮の意味も持つ。その毛皮は格別に柔らかく、良質の衣服に利用される⁽⁶⁸⁾。

「これらの毛皮を縫った衣服を着る」…この部分の原文 (А платье носят, в том же шьют) は意味が十分に明らかでないが、仮にこのように訳しておく。なお、この補足はソフィア写本 (及びこれに遡る17世紀の写本〔上掲O写本〕) にのみ見られる。

[4]

「同じ方角で、その人々よりも先の方、同じ海の向こう側には別のこのようなサモエド人がいる。口は上にあり、頭頂部についており、喋ることはできない。…両肩が上下に動く」…アヌーチンによれば、この情報は衣服の特性で説明される。「サモエド人の衣服は、頭を通すためにてっぺんに穴のあいた袋のように縫われており」、加えて「そうした衣服を着たままで食べることは全く不便であり、穴を折り広げて〔頭を出す〕か、或いは食物を口に入れるために口を上に向ける必要がある」⁽⁶⁹⁾。頭がなく、胸に顔がある人々に関する北方の物語はこの「物語」とほぼ完全に一致している。特に、ガナサン人の土地に近いレナ川下流で記録されたエヴェンキ人の伝説に登場するミラヴダとチュチュナフである。「彼らには顎がなく、彼らは咀嚼が出来ない。食べるときには、肩を上げたり下げたりして、そのことによって様々に胸郭を伸縮させながら食べ物を〔肩で飲み込む〕」⁽⁷⁰⁾。他方、先行研究で指摘されているのは、『インド帝国の物語』の記述との、同じく近い平行関係である⁽⁷¹⁾。そこでは「あるくには…人々は口をきけず」、「他の土地では…人々は上方

63 Герберштейн. Записки о Московии. С. 160, 336; Плигузов. Первые русские описания. С. 40.

64 Анучин. К истории ознакомления. С. 271.

65 Герберштейн. Записки о Московии. С. 160.

66 Плигузов. Текст-кентавр. С. 36.

67 БЛДР. Т. 5. С. 396.

68 Анучин. К истории ознакомления. С. 461-462.

69 Анучин. К истории ознакомления. С. 273.

70 Венедиктов Г.Л. Фольклоризация памятников древнерусской литературы в Русском Устье // Труды отдела древнерусской литературы. Т. 40. Л., 1985. С. 402.

71 Анучин. К истории ознакомления. С. 274; Плигузов. Текст-кентавр. С. 36.

に大きな口を持ち」と記されている⁽⁷²⁾。第1編集版のテキスト（「同じ方角で、その人々よりも先の方、…口は上にあり…口をきけず」）は『インド帝国の物語』に特に近い。第2編集版では「口をきけず (немы)」の語は省かれている。

[5]

「別のこのようなサモエド人がいる…冬の二ヶ月間は死んでいる」…冬になると死に、春に生き返る人々についてのロシア北方の話は、外国人旅行者、とりわけヘルベルシュテインの知るところであった（資料3を参照せよ）。「ルコモリエから来た人々には、驚くべき、信じがたい、そして極めて寓話に近いことが生じるという話を聞いた。彼らは毎年…[冬に]死に、次の春に…蛙のように息を吹き返すという話だ」⁽⁷³⁾。アヌーチンの意見では、サモエド人の間で人の姿をした偶像が広まっており、それによってそうしたイメージは生まれた。この偶像は、特に冬に、「それらが凍りついて、雪に埋もれて立っていたときに」、凍った人間を想起させただろう。「これらの偶像は自分たちの祖先、親族であったというような土着民の話が誤って解釈され、こうしたイメージを一層促進した」⁽⁷⁴⁾。ネネツ人の間に伝わる話に同様のモチーフがあることに注目したのはM.П. アレクセーエフとプリグーゾフである⁽⁷⁵⁾。インジギルカ川の河口に住むロシア人のもとでは、「チャンダラ」に関する類似の伝説が記録された⁽⁷⁶⁾。

「その場から人を動かすと、その者は蘇って意識を取り戻し、「おまえさん、どうして俺を不具にしたんだ」と言う。太陽が夏に戻ってくると、彼らは再び蘇る」…このテキストはソフィア写本（及びこれに遡るO写本）にのみ存在する。しかしこの部分は、ソフィア写本の写字生が第2編集版の原テキストを写す際に行った無意識的な省略の結果である。第1編集版では、「人を動かすと」の語の後に「その者は死ぬ。その者は蘇らず、他の者は太陽が夏に戻ってくると、彼らは再び蘇る」とだけ記されていた⁽⁷⁷⁾。また、現存しない第2編集版の原テキストでは「…取り除いて、その場から人を動かすならば、その者は死に、その者は蘇らない。その場から人を動かさないならば、その者は蘇って意識を取り戻し、『おまえさん、どうして俺を不具にしたんだ』と言う。他の者は息を吹き返し…」となっていた⁽⁷⁸⁾。だがソフィア写本では、下線を施した部分は、重複誤写による間違いの結果、脱落した（写字生の視点は「その場から人を動かすならば (сопхнет его с мѣста)」という句から、別の句「その場から人を動かさないならば (не сопхнет его с мѣста)」に飛び移っており、その結果、間にあったテキスト断片が抜け落ちた)。このように、『物語』の第1編集版でも、第2編集版のテキストでも、ソフィア写本の間違ったテキストとは異なり、「凍りついた」人間をそこから動かすことは、死に追いやることにつながったのである。

72 БЛДР. Т. 5. С. 396.

73 Герберштейн. Записки о Московии. С. 157, 160.

74 Анучин. К истории ознакомления. С. 277-284.

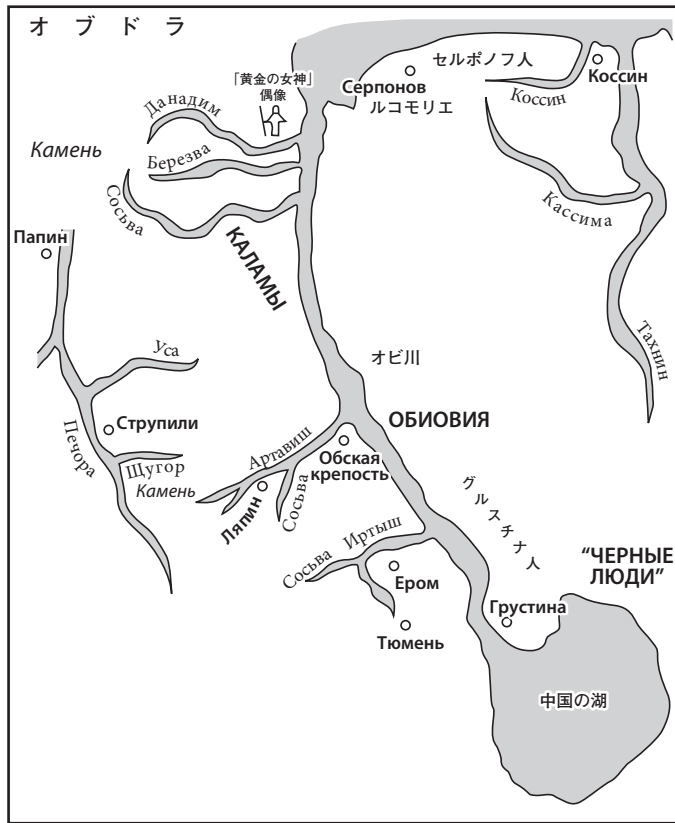
75 Алексеев М.П. Сказания иностранцев о России и ненецкий эпос // Советская этнография. 1935. № 4-5. С. 151; Плигузов. Текст-кентавр. С. 41.

76 Венедиктов. Фольклоризация памятников. С. 402.

77 Плигузов. Текст-кентавр. С. 79-80.

78 Плигузов. Текст-кентавр. С. 89-90.

資料3： Герберштейн. Записки о Московии. С.159 所収の地図をもとに作成



[6]

「大河オビの上流に」…アヌーチンは、この記述以降の話はオビ川上流の土地についてであるとした⁽⁷⁹⁾。一方ブリゲーズフは、バイドの地をオビ川の上流の東に位置するものとし1)「上手 вверх」が「南東」という意味で用いられている、2) バイドの地は、オビ河を上流まで遡ってから東あるいは南東に行ったところにあった、という二つの解釈をあげている⁽⁸⁰⁾。(次項の注を参照せよ。)

「バイドと呼ばれる土地」…16-17世紀の地図ではバイド(バイダ)の地はオビ川から東にあるにも拘わらず、アヌーチンはそれをオビ川上流やアルタイなどの南に探すことを主張した。そして彼はバイドの名称が「チュルク・モンゴル氏族」に関係していると考えた⁽⁸¹⁾。ブリゲーズフはこの見方に反論した。彼は第一に、地図作製者が一致してバイドの地を「モルゴムザイヤの地の東、エニセイ川の流れに近い、シベリア北部に配置している」こと、第二に17世紀にはまだこの地にはエネツ人の一氏族パイが住んでいたことを指摘した。要するに『物語』はこの氏族パイの土地(「タズとトゥルハン川の中流、上流流域に」

79 Анучин. К истории ознакомления. С. 284.

80 Плигузов. Текст-кентавр. С. 65-66.

81 Анучин. К истории ознакомления. С. 286.

あった) について記していることになる⁽⁸²⁾。

「クロテンのほかに動物は全くいない」…アヌーチンは、森がないという記述は、「クロテンは当然ながら森の動物である」が故に「これほど沢山のクロテン」がいることに矛盾するが、このことは、「この森が北部の途切れないタイガとは異なり、広葉樹と針葉樹が混じり合って山に生えている」ことで説明できると指摘した⁽⁸³⁾。プリゲーズフは、アヌーチンの解釈は『物語』に森がないとはっきり書かれていることと相容れないとして反論したが、しかし上の矛盾については説明していない⁽⁸⁴⁾。

[7]

「頭のないサモエド人がいる。口は両肩の間にあり、目は胸についでいる」…ヘルベルシュテインは、「頭のない」人々の土地がオビ川流域にあると記した。彼らは「全く首がなく、頭の代わりに彼らには胸がある」（ドイツ語版では「完全に首がなく、目は両胸にある」）⁽⁸⁵⁾。更に17世紀にオレアリウスは、頭のない人々というイメージを北方の衣装の特性で説明した⁽⁸⁶⁾。サモエド人（ネネツ人）の衣装のこの特性にはヴィッツェンも驚いてこう記している。「頭が凍える時、彼らは自分の上衣を頭まで引っ張り上げるのであり、これが極めて奇妙に見える」⁽⁸⁷⁾。B. O. ドルギフの意見では、頭部のない人々のイメージは、「帽子の代わりにフードがついた」極地の衣装が原因である⁽⁸⁸⁾。しかしアヌーチンは、自分の地理イメージ（上述）に相応して、この人々もまたオビ川上流に住んでいるとし、彼らをチュルク、或いはモンゴル氏族であると考えた⁽⁸⁹⁾。ガナサンには頭のない人々に関する伝説がある（「彼らには頭が全くなく、両肩には二つの目がある」⁽⁹⁰⁾「彼らには頭がなく、彼らの目は、腕の付け根にある」⁽⁹¹⁾）。同時に、プリゲーズフが指摘したように、『インド帝国の物語』には「目と口が胸にある人々」が登場する⁽⁹²⁾。

「生の鹿の頭を肩の上にある口に投げ入れ」…「頭のない」人々の所在を南の地に求めたアヌーチンの意見では、ここで言われているのはトナカイについてではなく、アカシカである。「鹿の角を頭に載せることがツングースのシャーマンにより実践されていた」（資料4の図を参照）。彼らが「あたかも飲み込んだ骨をゲップで出すようである」ことを、アヌーチンは「ここに書かれている民族の極端な不潔さ」（彼は、これはアルタイ・カルムイク人であると考えた）、また「彼らの居住地やその回りに食した動物の骨が散らばっていた」ことによって説明した⁽⁹³⁾。

82 Плигузов. Текст-кентавр. С. 54-65.

83 Анучин. К истории ознакомления. С. 284.

84 Плигузов. Текст-кентавр. С. 55-56.

85 Герберштейн. Записки о Московии. С. 158.

86 Оlearий А. Описание путешествия в Московию. СПб., 1906. С. 170.

87 Витсен. Путешествие в Московию. С. 116.

88 Мифологические сказки и исторические предания нганасан / Запись, подгот. текстов, введение и комм. Б.О. Долгих. М., 1976. С. 23.

89 Анучин. К истории ознакомления. С. 289.

90 Мифологические сказки и исторические предания нганасан. С. 136.

91 Мифологические сказки и исторические предания нганасан. С. 138.

92 Плигузов. Текст-кентавр. С. 36; БЛДР. Т. 5. С. 396.

93 Анучин. К истории ознакомления. С. 291-292.

「矢を射るときは一方の手に鉄の管を持ち、他方の手に鉄の矢を持つ。鉄の管に鉄の矢を通し、槌で矢を叩く」…これによく似た魔法の武器がエネツ人の神話の一つに登場する。「これらの矢をこの穴を介して放つ必要がある。そこで20プードの重さのハンマーがある。それで打つと、矢は勝手に的に当たる。もしこの矢をただ放てば、矢はこちらに向かって戻ってくる」⁽⁹⁴⁾。

資料4：頭に鹿の角を載せたツングースのシャーマン（*Анучин. С.292. より転載*）



[8]

「同じ大河オビの上流」…アヌーチンはこれもやはりアルタイのことであると考えた。とはいえ彼はサモエド人との伝承に地下に住む人々（シルチエ）に関する話があることも認めている⁽⁹⁵⁾。

「別のサモエド人がいる。地中にある別の川を伝い、昼も夜も灯をかざして歩き、湖に出る」…プリグーゾフは、同様のモチーフが『インド帝国の物語』のなか（「地中を小さな川が流れていて…この川は大きな河に流れ込んでいる。この土地の人々は川の河口に出かける⁽⁹⁶⁾」）にあること、また、カニン半島に住むネネツ人の伝承に地中に住む人々に関する話があることを指摘している⁽⁹⁷⁾。

「湖に出る」…アヌーチンの仮説では、ここで言われているのは、西アルタイのコルィヴァンスコエ湖とそのまわりの、町の遺構を想起させる岩場についてである⁽⁹⁸⁾。しかしながら、湖のそばの「秘密の町」に関しては数多くのロシアの伝説を挙げることが出来る⁽⁹⁹⁾。オビ川上流（源）の伝説の湖は、16-17世紀の西欧の地図学者の資料に記されてい

94 Мифологические сказки и исторические предания энцев. С. 29.

95 Анучин. К истории ознакомления. С. 297-300.

96 БЛДР. Т. 5. С. 398.

97 Плигузов. Текст-кентавр. С. 37, 41.

98 Анучин. К истории ознакомления. С. 301-302.

99 Перетц В.Н. Несколько данных к объяснению сказаний о провалившихся городах // Изборник Киевский: В честь Т.Д.Флоринского. Киев, 1904. С. 75-82; Лопарев Х.М. К легенде о затонувших городах // Труды XV Археологического съезда. 1914. Т. 1. С. 346-356; Комарович В.Л. Китежская легенда: Опыт изучения местных легенд. М.-Л., 1936. С. 7-15; Плигузов. Текст-кентавр. С. 43.

る。ヘルベルシュテインが利用した『ユグラの案内記』によれば、オビ川は「中国の湖 Кытайское озеро」から流れていた⁽¹⁰⁰⁾。他方で『ペルミ案内記』では、「大河オビは中国のボルヴェンニカ湖から流れている」と記されている⁽¹⁰¹⁾。オビ川源流の湖に関するマンシ人の伝説も知られている⁽¹⁰²⁾。「マンシ人から得られたフォークロアの性格を備えた情報を源とする、ユートピア的な地理の情報が我々にまで伝わった」というプリゲーズフの見解は恐らく妥当なものである⁽¹⁰³⁾。

「不思議な光が」…この補足は第2編集版の写本にのみ存在する。第1編集版では、その代りに、「湖の上に」の前に「我々のところと同じような光が」とある。

「生ある」…この補足はソフィア写本（及びそれに遡るO写本）にのみ存在する。「生ある живущий」というのは、ここでは「人が住んでいる、生活している」を意味する⁽¹⁰⁴⁾。

「人影はなく、喧騒も全く聞こえず、生あるものの気配もしない」…プリゲーズフは、この地中の都市についての話のなかに、「いくつかのモチーフの混同」を指摘する。「この源となる伝説上の核は、『インド帝国の物語』のテキスト、及びカニン半島に住むネネツ人の話（上述）と呼応することに加え、あちこちに散らばる「沈黙交易」に関する共通の主題、『チュド人の塚と地底の町に関するロシアの伝説』、そして有名な『キーテジ伝説』を含んでいる」⁽¹⁰⁵⁾。「生ある животна」とは、「生活、生活現象、生活の様相と関係した」を意味する⁽¹⁰⁶⁾。

「商品の対価を置いて、入用な物を取って外に出る」…「沈黙交易」に関する情報を、ヘルベルシュテインは、オビ川の東のルコモリエに住む人々（冬に「死ぬ」人々）のものとしている。「グルスチナとセルポノフの民はルコモリエの人々との間で、風変わりな、他のどこでも見られない商取引を行っている。「死」や冬眠の時期が来ると、彼らは決まった場所に商品を並べる。グルスチナ人とセルポノフ人はそれらを持ち去り、相応の額の商品を代わりに置いていく。もし彼ら（ドイツ語版では「ルコモリエ人」）が再び目を覚まし、彼らの商品が極めて不正な価格で持ち去られたと知ると、彼らは商品を返すよう求める。それが原因で彼らの間では度々いさかいと争いが生じる」⁽¹⁰⁷⁾。しかしアヌーチンは、様々な民族におけるこのモチーフを分析し、ここで話されているのはアルタイのテレツコエ湖のことだと考えた⁽¹⁰⁸⁾。プリゲーズフは『過ぎし歳月の物語』との類似点（ギュリヤタ・ロゴヴィチ某が語った、ユグラの山に住む人々についての話を書き留めたノヴゴロドの伝説）や『インド帝国の物語』との類似を挙げている。すなわち「地中を小さな川が流れている。ある時にその川の上で土地が割れ、これを見た者が、土地が彼の上で狭まらないようにその川に素早く飛び込み、掴んだものを素早く取り上げ、石であれば宝石であり、砂を掴んだなら、それは大粒の真珠であることがわかる。この川は大きな河に流れ込んでい

100 Герберштейн. Записки о Московии. С. 157; Анучин. К истории ознакомления. С. 278.

101 Плигузов. Первые русские описания. С. 49; Плигузов. Текст-кентавр. С. 25.

102 Гондатти Н.Л. Следы язычества у инородцев Северо-Западной Сибири. М., 1888. С. 19.

103 Плигузов. Первые русские описания. С. 49-50.

104 СРЯ. Вып. 5. 1978. С. 106.

105 Плигузов. Текст-кентавр. С. 42-43.

106 СРЯ. Вып. 5. С. 106.

107 Герберштейн. Записки о Московии. С. 160.

108 Анучин. К истории ознакомления. С. 302-305.

る。この土地の人々は河口にでかけ、宝石を手にした」⁽¹⁰⁹⁾。

「生ある」…この補足はソフィア写本（及びそれに遡る O 写本）にのみ存在する。上記同じ語に付した注釈も参照のこと。

[9]

「カメンスカと呼ばれる別のサモエド人がいて」…「カメンスカ（直訳すれば『石の』）」は概して「山の、山に住む」を意味するが、しかし「石」というのは「山」全般だけでなく、ウラル山脈の名称でもある⁽¹¹⁰⁾。またオクシノフは「この話はオビ湾沿岸、北ウラルの斜面に住むサモエドについてである」ことを指摘した⁽¹¹¹⁾。「カメンスカ」という名称は、恐らく、「石」、つまりウラル山脈を表す地名と関係しており、続くテキストで明確にされているように、この地はユグラの地の近く」にあり、その住民は「高い山に住んでいる」⁽¹¹²⁾。従ってこれはオブドラのネネツ人（ユラキ）についてである。その遊牧地はウラルの東斜面まで達し、オビ川下流のハンティ人の居住地域と隣接する⁽¹¹³⁾。

「…と犬」…この補足は第 2 編集版の写本だけに存在する。[1] の同様の語に付された注釈を参照のこと。

「^{レカリ}薬師の人々がいる…癒す」…アヌーチンによれば、「薬師というのは、恐らくシャーマンのことである」。彼らは「奇蹟のような様々な技を行い」、ナイフや歯で病んだ腹を切り裂き、次いでそこから取り出された「獣、ウジ、或いは単なる毛一本」を見せる⁽¹¹⁴⁾。プリグーゾフは同じく「知られざる人々の医師は…疑いなくシャーマンであり、その力は異国人の聞き伝えで、著者により完全に信じられた上で書かれている」ことを指摘した⁽¹¹⁵⁾。「薬師」は「医者」を意味する。15 世紀末にはこれは極めて希な言葉であった。この語はエルモーリン年代記の 1490 年の項にもある⁽¹¹⁶⁾。

「サモエドの老人たち」…ここで記された光景の目撃者であるサモエドの老人についての言及は、第 2 編集版でのみ登場する。

「海の近くに死んだ仲間がいるのを」…アヌーチンは、マンシ人の信仰に従えば、地中の帝国が「オビ川の河口の北氷洋に」あったこと、マンシ人の神で背高のクリ・オディルが死者の魂を捕まえ、大きな棍棒で彼らを追い立て、ツンドラを通過して自分のくにに連れて行くことを指摘した⁽¹¹⁷⁾。巨神クリ・オディルに関するユグラの伝説が繰り返されていることを指摘したプリグーゾフは、同様にマンシの地中の帝国が「オビ川河口の海のなかに」あることを指摘した⁽¹¹⁸⁾。

「沢山の死者」…この補足は第 2 編集版の写本にのみ存在する。

109 Плигузов. Текст-кентавр. С. 37.

110 СРЯ. Вып. 7. 1980. С. 44-46.

111 Оксенов. Слухи вести о Сибири. С. 114; Анучин. К истории ознакомления. С. 306.

112 Оксенов. Слухи вести о Сибири. С. 114; Анучин. К истории ознакомления. С. 247-249.

113 Плигузов. Текст-кентавр. С. 70.

114 Анучин. К истории ознакомления. С. 307-308.

115 Плигузов. Текст-кентавр. С. 42.

116 СРЯ. Вып. 8. 1981. С. 187.

117 Анучин. К истории ознакомления. С. 308.

118 Плигузов. Текст-кентавр. С. 42.

「その後ろから鉄の棒で死者を追い立てながら巨人が続いたそうだ」…アヌーチンの意見では、サモエドはクリ・オディル信仰をマンシ人から取り入れた⁽¹¹⁹⁾。「棒 палица」というのは、「杖、棒、棍棒、槌矛のこと。鉄は聖なる権力を意味した」⁽¹²⁰⁾。

119 Анучин. К истории ознакомления. С. 308.

120 СРЯ. Вып. 14. 1988. С. 134.